読切り連載

アカンタレ勘太 <1>

作　いの しゅうじ

にゅうがく

おまわりさん帽子

　勘太が小学校に入学した。
　おじいさんがとてもよろこび、おいわいに学生帽をおくってくれた。
　勘太はこの帽子をきりっとかぶり、おかあさんにつれられて学校の門をくぐる。金次郎さんがむかえてくれた。

　金次郎さんは、たきぎを背にしょって歩きながら本をよむ二宮金次郎の像のこと。勘太は帽子をぬいで、金次郎さんにぴょこんとおじぎした。もういちど帽子をかぶったとき、そばにいた二年生の勝也がはしゃぎたてた。
「アカンタレ勘太、おまわりさん帽子」
　勘太はなんのことかわからず、ぼーっとしている。
すると、勘太とおなじ新入の子ら４、５人がいっしょになってふざける。
「アカンタレ勘太、おまわりさん帽子」
　みんながかぶっている帽子は波だっているけど、勘太のはてっぺんが平だ。ときおり巡回にくるおまわりさんの帽子のようなので、みんなが

わらったのだ。
　勘太は三つになっても歩けなかった。ほとんどの子は1歳半くらいには歩きだす。３歳にもなれば、自転車ではしりまわっている子もいるというのに、勘太はよっちらよっちらとはいはいしている。
　おかあさんは買いものにいくとき、いつも勘太をおんぶする。と、近所のおばさんたちが、
「あのこ、アカンタレやねえ」
　と、かげぐちをした。あっという間にうわさが広がり、悪ガキどもから勘太にアカンタレをつけて「アカンタレ勘太」とよばれるようになった。
　おじいさんは、
「この子は一生歩けんやろ。かくごしておけ」
　と、なんどか勘太のおかあさんにいい放ったが、おかあさんはそのつど、きりっと言いかえした。
「わたしが歩けるようにします」
　勘太がひょっこり歩きはじめたのは３歳と３カ月くらいのころだ。
　お兄さんの淳吉がつくえの上で飛行機のもけいを作っているとき、勘太がいすにつかまり立ちした。
　そのままひょろひょろと二、三歩あるいているのを、ハサミをさがしていた淳吉が気づき、大声をあげた。
「勘太、歩いてる」
　台所にいたおかあさんがとんできた。
「カンちゃん、やったね」
　勘太をだきあげるおかあさん。涙をぽろぽろながしてる。
　あくる日、となりまちにいるおじいさんがやってきて、勘太にやくそくした。
「学校に上がるとき、帽子を買うたる」
「帽子なんか……」
　とけげんそうなおかあさんに、
「ふつうのとちがう。りっぱな大人がかぶる。そんな帽子や」
　おじいさんは大阪駅のえらい駅員さんにあこがれていた。いくつもの赤や金色の線がついた帽子をかぶっているからだ。
　さすがに勘太におくった帽子に線はないけど、おじいさんの気分は「大阪駅の駅員帽」。
　勘太の町から大阪駅まで電車で1時間半もかかる。ほとんどの子は大阪駅に行ったことがない。勘太の帽子を見て、おまわりさんの帽子とお

もうのもむりはない。
　勘太のおかあさんは子どもたちをにらみつけた。
「この帽子はりっぱな帽子です」
　勝也もまけてはいない。
「アカンタレ勘太には似合わん」
「この帽子をかぶったらアカンタレでなくなるの」
　ナイフの先みたいなするどい声に、勝也はひるんだ。
「負けたらあかんよ」
　おかあさんにそういわれても、勘太は肩をすぼめてぶるぶるふるえていた。

レンゲのかんむり

　イッ子せんせいがしゅっせきをとりはじめた。
「名前をよばれたら、ハーイと元気よくこたえるのよ」
　勘太の席はさいぜんれつ。イッ子せんせいは勘太のつくえの前にたっている。
　せんせいは背がひくいのに、勘太が首をぐっとそらさないと顔はみえない。あおぎ見ると、まるい顔からやさしい笑みがこぼれている。
（こないだもこんな顔してはった）
　勘太は1週間ほど前のできごとを思いだした。
　おかあさんの買いものについて行くとちゅうだった。タバコ屋のわきのポストにイッ子せんせいがはがきを入れようとしているのを、おかあさんが気づいた。
「あら、宮井先生、むすこの勘太。こんど入学しますねん」
　宮井先生。名まえは衣津子。先生になってまだ1年。いつもニコニコ顔だ。みんな「イッ子せんせい」とよんでいる。
「ああ、アカン……勘太くんね。勘太くんのクラスの担任になるのよ」

　イッ子せんせいになれなれしくしていた勘太のお母さんは、たいどをガラッとかえた。
「アカンタレですけど、よろしくお願いします」
　と、頭を九十度いじょう下げる。
「勘太、ちゃんとあいさつしなさい」
「……」
　カンタです、と言おうとしたが、声がでない。勘太ののどが、北極にほうりだされたみたいにこおりついてしまってる。
「すいません。しつけをきちんとしてなくて」
　ぺこぺこ頭をさげるおかあさんの後ろに勘太はかくれた。
「井田勘太くん」
　イッ子せんせいがなまえをよんだ。教室じゅうにひびく大きな声だ。そろっと勘太は手をあげ

た。でも「ハイ」がのどからでてこない。のどの奥がぴしゃっと戸じまりしてる。ウンウンうなってるだけ。
いまにも泣きだしそう。
「勘太くん。いないの？」
　教室の後ろにいたおかあさんが、
「勘太、ハイといいなさい」
　と声をはりあげる。
　勘太が声をしぼりだした。
「おしっこ」
　わーっとみんなが笑った。おかあさんは顔をまっかにしてその場にしゃがみこんでしまった。
「お便所にいきたかったのね。いいわよ、いってらっしゃい」
　というイッ子せんせいも出席簿で笑いをかくしている。
　勘太は自分でもなぜ「おしっこ」と口ばしったのかわからない。声をだそうとしたら、どういうわけかおしっこがもれそうになった。
　校舎はコの字型になっていて、勘太の教室は門の左。便所は門の右がわだ。講堂で入学式をおえたばかりだから、勘太は便所のばしょをしらない。
　勘太はいつのまにか門のそとに出ていた。
　まわりはいちめん田んぼ。どの田んぼにもレンゲソウが植えられていて、レンゲの花がひらひらと風にそよいでいる。
　勘太は赤紫のレンゲのせかいにふらふらっと入りこんだ。
「どうしたのかしら」
　いつまでたっても勘太がかえってこないので、イッ子せんせいは便所をのぞきにいった。
「勘太くん、どこにもいない」
　大さわぎになった。先生もお母さんたちも手わけして探しまわる。
「レンゲ畑かもしれん」
　とつげたのは勘太と幼稚園がいっしょだった哲則だ。２０分ほどして、勘太はみつかった。
　勘太はレンゲソウをつんでいた。
「何するの？」
　イッ子せんせいに、勘太は鼻水をすすりあげ、ぽそっとこたえた。
「レンゲのかんむりを作るねん」
「なんのため？」
「イッ子せんせいにあげるんや」

読切り連載

アカンタレ勘太 <2>

作　いの しゅうじ

えんそく

おすしのお弁当

「えんそく、えんそく――」
　勘太はリュックサックをせおって、家のなかを歩きまわっている。
　１年生の春のえんそくは、毎年となりのＨ町のゆうえんちと決まっている。
　入学して１カ月あまりがたったころ、イッ子せんせいは黒板に大きな字で、
「えんそく」
　とかいた。
「いいですか、今度のすいようびがえんそくですよ」
　せんせいに言われなくてもみんな知っている。
「ハーイ」
　おもいきり元気なへんじが教室中にひびいた。
　勘太が家にかえるとリュックサックが居間の

ちゃぶだいにおかれていた。おかあさんが買ってきたばかりのま新しいリュック。左右のポケットに青い線がはいっている。
　勘太はさっそくせおってみた。背中にリュックがやわらかくふれる。つんとすましてるランドセルとはおおちがい。
　勘太は３げん向こうのなのはな畑にでかけた。あぜにすわり、リュックからおべんとうを出すしぐさをする。むねがはじけそう。
♪早くこいこい、えんそくが
「お正月」の童謡をかえうたにして口ずさんだ。
　えんそくの前の日。学校からかえると勘太はおかあさんの買いものにつきっきり。おべんとうに巻きずしをつくったげる、と約束してくれたのだ。
　かんぶつ屋さんでノリやかんぴょう、北島のやおやさんではミツバ、肉屋さんで卵――。
　ゆうしょくを終えると、おかあさんは巻きずしづくりにかかった。
「おべんとうで恥かきとうないねん。じょうずにつくってや」
「心配せんでええ、だれよりもおいしそうなおすしができるさかい」
　といいながら、にぎったごはんを巻きすの上にのばして、くるくるっと巻くおかあさん。そのすばやい手さばき。勘太は目をかっとひらいて見つめている。
　えんそくの日がやってきた。
　電車とバスをのりついでゆうえんちへ。イッ子せんせいを先頭にゲートをくぐる。
　勘太の目は飛行塔をさがしていた。塔のてっぺんからつり下げられた飛行機がぐるぐる回る飛行塔。そのそばの広場で食事をするはずだ。
　お兄さんの淳吉が、
「飛行機見ながらべんとう食べることになってる」
　とおしえてくれたのだ。
「きれいな小川がある」
　淳吉のことばを勘太は頭にいれた。
　園内をうろうろしているうちにお昼のじかん

に な っ た。
　やはり飛行塔のそばの芝生の広場だった。淳吉のいう とおり、ほぼまん中を小川がながれている。はば３メートル、深さは５０センチくらい。勘太は川のそばにすわった。
　巻きずしは竹の皮につつまれている。ひざにのせて、竹のひもをほどいたときだった。岸からムカデがはいでてきた。
「ギャー」
　勘太はぱっと立ちあがった。巻きずしはひざから竹のつつみごと小川におちた。
「あ、しまった」
　と大声をあげたのはイッ子せんせいだ。川岸にいる勘太を見て、
「こっちに来なさい」
　と言おうとしたやさきだった。
　おすしは竹の皮の舟にのって、ゆらゆらとながれている。
「ぼくのおすし、およいでる」
　勘太は川にはいろうとした。
「だめ、はいっては」
　イッコせんせいのきっとするどい声がとんだ。
　せんせいは、菓子パンの一つを勘太にあたえた。巻き貝のかたちのパンだった。なかにチョコレートがつまっている。ほおばると、やわらかなチョコレートが口いっぱいにひろがった。
　そのふわっとしたあまい味を勘太はいつまでも忘れなかった。

レーシングカー

　イッ子せんせいにもらったパンを勘太がたべおえたとき、テッちゃんが近よってきた。
　だれにでも話しかけることができる哲則。じょうだんを言ってけらけらと笑う明るいせいかくだ。入学して１週間もたたないうちに、みんなに「テッちゃん」とよばれるようになっていた。
　テッちゃんの家は勘太の家の近く。ようちえんがいっしょだから、入学前からのともだちだ。テッちゃんが勘太の家になんどもあそびに来ているので、勘太のおかあさんもテッちゃんをよ

く知っている。
「べんんとう落としたこと、おかあさんに黙っといてや」
「ぼくは口がかたいんや」
　テッちゃんは口にチャックするまねをした。
「あとでレーシングカーのりに行こ」
　食事のあと、一つだけ乗り物にのれるのが決まり。おべんとうのまえ、テッちゃんにさそわれて勘太はメリーゴーランドとモーターボートにのった。メリーゴーランドは回転木馬。モーターボートは池の中をぐるぐるまわる回転ボート。テッちゃんはカタカタ名の回転ものがすきなのだ。
　レーシングカーはこのゆうえんちの一番にんき。よそにないゴーカートをと、さいきん、先がとがった最新型車をとりいれた。こども新聞に「アメリカ生まれのスマートな車」ととり上げられたので、にちようびには長い行列ができるそうだ。
　レース場はちょっけい２０メートルの円形。６台の車があり、右まわりで３周する。車は、はば５０センチ、長さ１・５メートルくらい。
　よその小学校の子ども４、５人が並んでいた。じゅんばんを待つ間、テッちゃんは、
「ぼくはのったことあるねん。ぼくの後についてくるんやで」
　と、さもせんぱいづら。
「そやけど心配や。おべんとうのことがあるよって」
　テッちゃんのよけいな一言がいけなかった。勘太は「運転ようせん」といえず、「だいじょうぶ」とむねを張ってみせた。
　テッちゃんがのった車がさーっと走りだした。次の車がとうちゃく。勘太はかかりのお兄さんにうながされて車にのった。
　はっしゃしない。４、５秒たってお兄さんはあわてた。
「ペダルに足のせるんや」
「そうそう、ペダルふんでごらん」
　車がそろっとうごいた。５、６メートルほど走るとよたよたしだした。
「ハンドルもつんや」
　お兄さんの大きな声がひびいた。じゅんばん待ちをしていた同じクラスの勝や隆三らが「な

にごとか」とレース場をのぞきこむ。
　勘太は「ハンドル」がなんのことかわからない。どうすればいいのか、頭はパニック、足はこちこち。ペダルだけはふみつづけている。
　車はもたもたしながらすすんだ。
「ハンドル右にきれ」
お兄さんの叫びと、車がレース場の壁にぶつかるのは同時だった。
「グワー」
　というにぶい音。お兄さんがすっとんできた。
　壁にはゴム板がはりつけてある。車にきずがないことがわかって、ほっとした顔のお兄さん。
車にのり、勘太の横にわりこんで運転をはじめる。
「アカンタレ勘太、アカンタレ勘太」
　勝と隆三が声を合わせてはやす。テッちゃんも気づいて車をとめ、ふりかえって見ている。
　お兄さんは３周はしってくれた。「１周だけでええからおろして」とも言えず、勘太はただうつむいている。
　その日の夕ごはんのとき。おかあさんがうす笑いをうかべた。
「勘太、おすしどうやった」
「おいしかった」
「川でびしょぬれになったん、食べたんやね」
「ムカデがわるいねん」
「レーシングカーもムカデおったんか」
　といいながら、おかあさんは腹をかかえている。

次号に続く

読切り連載

アカンタレ勘太 <3>

作･挿絵　いの しゅうじ

げんし人

ほら穴

　勘太は校門のところでイッ子せんせいをまっている。隆三のおとうさんから「げんし人がよこ穴にすんでた」と聞いたので、げんし人とよこ穴のことをたずねてみようと考えたのだ。
　せんせいが自転車でやってきた。
「あら、勘太くんじゃないの」
　いつもおどおどしているのに、きょうはどうしたの？
　というおどろきの目で勘太をみつめる。
「げんし人ってどんな人ですか」
「げんし？」
「よこ穴にすんでた人です」
「あ、原始人ね。原子爆弾かとびっくりしたわ」
　せんせいはククッとわらう。
「じゃあ職員室にいらっしゃい」

　イッ子せんせいのつくえは職員室の窓のところ。入り口でもじもじしていると、せんせいが「こっちよ」と手でまねいてくれた。
「どうしてげんし人のこと知りたくなったの」
　隆三のおとうさんが教えてくれた、とこたえると、せんせいは書だなから絵本をとりだした。
　本のだいは「日本の歴史　旧石器時代」。「狩りをする

古代人」のページをひらくと大きな絵。石オノを手にしたターザンみたいな姿の男たちがシカをつかまえている。

「二万年以上も昔よ」
「よこ穴にいたんですか」
「ほら穴にいたんじゃないかしら。スペインに有名な洞くつがあるわ」
　勘太には、せんせいの言うことがよくわからない。お宮さんの森であそんだターザンごっこが、げんし人ごっこだったとわかっただけでも、しゅうかくだ。

　教室にもどると、隆三がそばによってきた。
「よこ穴できたんや」

　隆三のおとうさんがきのう山に行って準備したらしい。
　つぎの日曜日。テッちゃんに武史、徹がくわわって隆三の家へ。
　おとうさんがドンゴロスという布袋を五枚、作業小屋からとりだしてきた。ナイフで底を二十センチほどあけて、両わきをばさっと切る。
「着てごらん」
　子どもたちが頭からかぶる。ゴワゴワして着ごこちがわるい。
「げんし人や。ぜいたく言うたらあかん」
　おとうさんはなべ、まないた、アルマイトの食器、みそ入りの袋、キャベツを子どもたちにもたせる。みそ汁をつくるつもりらしい。
「カンテキとマッチは？」
　カンテキは七輪のこと。テッちゃんがたずねると、隆三のおとうさんはニヤッとわらった。
「出発や」
　隆三のおとうさんの後についてうら山をのぼる。十分もすると頂上。さらに山がつづいている。ササがうっそうとしているだらだら坂を三十分ほどすすむと、せまい空き地にでる。
「着いた」

　空き地は草がぼうぼうに生い茂っていたが、隆三のおとうさんがわざわざ刈ってくれていた。
　空き地のむこうに巨大な岩がすいちょくにたっている。その岩の下には、何かにえぐられたような大きな穴。はばと高さが二メートル、奥行きは三メートルくらい。
「子どものころ、ここであそんだんや」

　げんし人の横あなやった、とおじいさんから聞いたという。
「うそやと思うけど」
　わらいながら、おとうさんはほら穴の中から、ノート半分くらいの石を五個もってきて、なわで棒にくくりつけた。
「石オノができた」
　勘太らが石オノを手に、
「シカがりだ」
　とはしりまわる。そのころあいをみはからって、隆三のおとうさんは大きな声でみんなを呼んだ。
「さあ、火をおこすぞ」

火おこし

　隆三のおとうさんが板を布袋からとりだした。長さが二十センチくらいの杉の板だ。
「これで火をおこすんや」
　テッちゃんが「マッチは？」ときく。「使わん」という返事。
　歴史が好きという武史が自信ありげにたずねる。
「火打ち石を使うんでしょ」
「ちがう」
　おとうさんは布袋から三十センチくらいのなわ、五十センチくらいの細い棒をだした。
「火をおこす道具や。どんなふうに火が生まれるか考えとき」
　と言って、なわをときほぐし、ふわっと丸くしている。
「何につかうのん」と勘太がたずねると、おとうさんは地面に「火口」とかいた。
「ひぐち？」
「ほくち、と読むんや。これが火だねになる」
「おふろたくとき、はじめに新聞に火をつける。その新聞みたいなもんか」
　テッちゃんの質問におとうさんは、
「そや、その新聞や」
　と笑顔でこたえ、
「枯れたススキをさがしといで」
　とみんなに命じる。
　そういえばここに来るとちゅう、ススキが風にゆれていた。
　ススキを取ってくると、お父さんはほら穴の入り口に、

ススキと木の枝を山形に組みあげる。
「さあ、はじめるぞ」
　そばの切り株のうえに板と棒をおく。
　棒の先に板をあてがい、両手できりもみにくるくる回しはじめる。
　勘太は目をこらす。板が棒でこすられたところに木くずができる。
　三分、五分――。木くずが赤くなる。
　おとうさんはこの木くずを火口に移しかえる。
　フーと息を吹きかける。ボッと小さく炎があがった。
「火や、火がついた」
　テッちゃんは、体に火がついたみたいにこおどりした。
「マッチに火がつくのと同じりくつや」
　といったのは武史。
「きみは賢いなあ」
　隆三のおとうさんは火口を手のひらにのせ、その火口でススキに火をつける。しばらくすると木の枝に火がもえうつり、ボーと炎がもえあがる。
「せいこう」
　おとうさんはみんなに用をいいつけた。
　武史と徹はキャベツを切る石をさがす役、テッちゃんはおたまの代わりの枝を見つける役、勘太はなべに水を入れる役。隆三は火のまわりを石でかこってかまどをつくる役。
　勘太は鉄なべを手に岩のうら側にむかう。岩の間から水がわいている、とおとうさんが教えてくれたのだ。
　すぐに見つかった。だが草のうえをチョロチョロと流れているだけだ。
　ニ十分たっても勘太は帰ってこない。
　とがった石でキャベツを切りおえた。みそをなべに入れるおたまの準備もできている。
　なべはまだかとみんなイライラしている。
　ようやく勘太の姿がみえた。
「勘太、はしれ」
　テッっちゃんが大声をあげた。
　勘太は水がいっぱいのなべをかかえながら走る。
　煙がぱっと目にはいる。ほら穴の手前の小さな段差にけつまずいた。
　体がぽーんと宙にはねる。
「あっ」
　と勘太がさけんだとき、なべが手をはなれた。水が滝になってどっとかまどに流れおちる。
　ジュー。
　たちまち火は消えてしまった。

次号に続く

読切り連載

アカンタレ勘太　＜4＞

作・挿絵　いの しゅうじ

空飛ぶえんばん

勘太は二年生になった。

　一学期の始業式のとき、イッ子せんせいが、
「あしたから完全給食がはじまります」
　一年生の三学期に給食の日があったので、みんな給食のことはしっている。そのときはコッペパンとミルクだけ。おかずはなかった。
「おかずもつくのよ」
「おかずはうれしいけど、ミルクはいやや」
　ユキちゃんは口もとをゆがめた。
　イッ子せんせいは黒板に「脱脂粉乳」とかいて、
「だっしふんにゅう。今はしかたがないの」
　と、しょぼんと言った。

　つぎの日、四時間目がおわるといよいよ給食時間。
　最初の当番は男の子と女の子それぞれ三人。六人は、ミルクやおかずがはいったバケツ、アルマイトの食器をおさめたかごを調理場から教室までさげてきた。食器にミルクやおかずをわけいれて、みんなにくばる。
　はじめてだから手ぎわがわるい。十分いじょうたってようやくみんなの机に食べものがならんだ。

アカンタレ勘太　＜4＞　いのしゅうじ

　ひらたいお皿が二つあって、ひとつにはコッペパン、もうひとつにはおかず。おかずはクジラのあげものと千ぎりのキャベツ。おわんの中にはミルク。

　せんせいもいっしょに食べる。
「いただきます」
　元気に声をそろえたとき、用務員のおじさんがドアをあけた。
「せんせい、電話です」
　イッ子せんせいは、はっと顔色をかえ、
「ごめんね」
　と、とんで出た。

　パンはほとんど味がない。クジラのあげものは冷えている。けれども勘太は気にならない。おなかをすかしていたので、すすっとたいらげる。
　やっかいなのはミルク。ぬるっとしていて、表面にうっすらと白いまくができている。口にふくむと、回虫くじょのシロップみたいなぐだっとした汁が、ねっとりと舌にまとわりつく。

　勘太は鼻をつまんで一気にのんだ。
　食べおえてユキちゃんの食器をのぞいてみると、ミルクはちっともへってない。
「こんなん飲まれへん」
「むりしてでも飲め。ユキちゃんが食べおわらんかったら、あそびにいかれへん」

　テッちゃんはユキちゃんに文句をたれながら、皿を指さきにのせてくるくるまわしている。
「空飛ぶえんばんみたいや」
　といって、武史は自分の皿をもちあげた。
「何や、空飛ぶえんばんって」
　ときいたのは勘太。
「どこかの星から飛んできたんや。フライパンをさかさにしたみたいな形してて、うちゅう人が乗ってるねん」
　武史はおとうさんから聞いたという。武史のおとうさんはぼうえき会社につとめている。
「アメリカで十年まえに発見されたんやて」
　テッちゃんは武史の話にとびついた。
「よっしゃ、空飛ぶえんばんごっこや」
　と、武史にむかって皿を水平にしてなげた。ゆかにカチャンとおちる。その皿を武史は勘太のほうになげる。
「ぼくもやる」

　勘太がころころ転がる皿をひろって、隆三に投げようとすると、タミちゃんがさけんだ。
「やめとき。せんせいに言いつけるで」
「せんせい」のひとことに勘太の手もとがくるった。皿は教室の入り口のほうにとんでいく。
　そのとき、ドアががらっとあいた。
　イッ子せんせいがはいってくる。えんばんはおでこにゴツンとぶつかった。
　せんせいは涙をうかべている。
「アッ、アウ、アァー」
　勘太はふんづけられた子犬みたいな声をだした。

春の小川

　イッ子せんせいは涙をハンカチでぬぐった。
「みんな、よく聞いてね」
　せんせいは背をむりにのばした。
「せんせいのおとうさんがけさ亡くなったの」
　勘太がなげた皿があたったから泣いたのではないのだ。
　でも、お正月にせんせいの実家をたずねたとき、そんな様子はなかった。
「むねの病気。二月ごろから急に悪くなったの」
　せんせいの机には給食がおいたまま。涙がミルクにぽとっとおちた。
「給食たべなきゃね」
　せんせいは顔にわらいをつくって、
「ユキちゃん、せんせいが食べおえるまでにミルク飲んでしまうのよ」
　とやわらかく言った。
　せんせいは手早く食べおえた。ユキちゃんもがんばってミルクをすっかり飲んだ。
「あすからせんせいはしばらく休みます。教頭せんせいが代わりに勉強をしてくれます」
　みんな「えっ！」と顔をあげた。
　朝礼のとき、教頭せんせいはいつも、「気をつけ」と命令して、「話は目できく」と訓示をたれる。そのすがたをイッ子せんせいはいやそうに見ている。だから勘太も教頭せんせいを好きになれない。
　教頭せんせいが教室にはいってきた。
　さいしょは国語。野口英世のものがたりをみんなで声

にだして読む。きりのよいところで、せんせいは、
「野口少年はどうしたんや」
　とたずねる。（当たりませんように）と下をむいている勘太を見すかしたように、「キミ」と指さした。
　こたえられない勘太を、
「手にやけどしたんだ」
　と、こわい目でにらみつけた。
　こんなぐあいだから、勘太は毎日がびくびくだ。
　五、六日たった土曜日。テッちゃんが、
「イッ子せんせい、がっこうにくる」
　と声をはりあげた。
　おそう式のために実家にかえったせんせいは、あしたの日曜日にもどってきて、月曜日からいつもの授業になる。「教頭せんせいからきいた」とテッちゃんがいうと、ワーとみんなわきかえった。

　ユキちゃんひとり、しくしく泣いている。
「イッ子せんせい、かわいそう」
　テッちゃんがユキちゃんの顔をのぞきこんだ。
「あした、せんせいのとこに行こ」
「うん」
　ユキちゃんがこくりとうなずく。「ぼくも行く」と勘太。武史も隆三もタミちゃんも、みんな「行く」と言いだした。
　せんせいの下宿はまんかん寺のうらの長屋。六畳の部屋に間がりしている。
　外ががやがやしているので、せんせいが引き戸をあけると、おおぜいの子どもが立っている。
「どうしたの？」
「せんせいをなぐさめに来ました」
　と武史。目がまんまるになったイッ子せんせい。
「ここはせまいから」
　みんなを近くの小川につれていった。
「春の小川の歌をうたいましょ」
　はばが二メートルほどの川の両岸に、男の子と女の子がむかい合って並んだ。せんせいは川の中のひらたい石のうえで指揮をする。

♪春の小川はさらさら行くよ　岸のすみれやれんげの花にすがたやさしく色うつくしく　咲けよ咲けよとささやきながら

「せんせいはね、みんながやさしくて心のうつくしい子なので、とってもうれしいの」
　イッ子せんせいの声はさわさわしていて、春のそよ風みたいだ。
　でもまぶたはうっすらと赤くはれている。
と気づいた勘太。ワーッと泣きだした。

次号に続く

アカンタレ勘太５

作・画　　いのしゅうじ

カヤのキャンプ

　勘太のおとうさんが、つとめ先のがっこうから久しぶりに帰ってきた。
　かぞくみんなで夕食をかこむのは二カ月ぶりくらいだ。
　おとうさんが思いがけないことをいいだした。
「キャンプに行こう」
「うちにはテントがありません」
　おかあさんはバカバカしいという顔だ。
　おとうさんは、
「古いカヤ（蚊帳）がまだあるはずじゃ」
　と、さぐるような目でおかあさんにたずねる。
「せんそう中に使ってた四畳半用のこと？」
「そのカヤをテントにするんや」
　おとうさんは四、五日前、教え子の一家が河原でカヤをはっているのを見かけた。
「何してるの？」ときくと、「キャンプです」と元気なこたえ。子どもたちの目はキラキラしている。
　よし、わが家でもやってみよう。
「と思ったんや」
　おとうさんの話に勘太がとびついた。
「ぼくもキャンプやりたい」
　二人のおにいさんも、
「キャンプして泳ぐんや」
　とすっかり乗り気。
　おかあさんとおねえさんは、「日帰りなら」と、しぶしぶさんせいした。
　つぎの日、下のおにいさんの淳吉が図書館から「お手ごろキャンプ場」という本をかりてきた。
　保津川のページに「亀岡と嵐山の間の渓谷。舟がくだるのにあわせて、じょうききかん車がはしる」と書いてある。
「ここがええ」
　その日の夕食のとき、みんなで計画をたてた。
　ご飯はハンゴウでたく。ハンゴウはせんそう中、万一のためにと用意しておいたものだ。いまは床下に二つころがっている。お風呂にくべるまきをできるだけ細くしておく。

　問題はおかず。勘太は「カレー」といったが、おかあさんは「肉がくさる」と受けつけない。けっきょく、おかずは梅ぼしだけ。
　カヤはおとうさんがリュックにつめる。お米とハンゴウは上のおにいさんの康弘、まきは淳吉、勘太の小さなリュックにはみんなの水着。途中でスイカを買っておかあさんとおねえさんがさげていく。
　キャンプ当日、朝五時におきた。
　京都駅から山陰線に乗り、保津峡駅でおりる。二十分ほどで保津川の谷間にとうちゃく。
　大きな岩がごろごろしている。その間を水がゴウゴウと流れ、波の頭がびりりっとくだける。
　川べりに四本の木が四畳半くらいのスペースをあけて立っている。ここでカヤをつってくれ、と言ってるみたいに。
　みんなでカヤをつりおえた。
　そこは草っ原だ。さっそく勘太は寝ころがる。
　おねえさんはハーモニカをふきだした。
　淳吉はカヤをつってる木にこげ茶色の虫がいるのを見つけた。「カブトムシや」とこうふんしている。
　康弘は石をつみあげてカマドをつくり、ハンゴウのよういをはじめる。
　やがてハンゴウがぶつぶつあわをたてだした。
「皿にする石さがしてこい」
　康弘に命じられて、勘太はたいらな石をひろいにいく。
「できた」
　康弘の声で、カヤの中にいたおとうさん、おかあさん、おねえさんもハンゴウのまわりにあつまった。
　康弘と淳吉が、あつあつのハンゴウのふたをあけ、ごはんをひっくり返す。下の方はおこげばかり。
「ま、これがキャンプや」
　おとうさんはニコニコして、石の皿におこげをもった。
　向こう岸にじょうききかん車が、
ゴッゴゴッゴ
　と、あえぎあえぎ、ゆっくり走ってきた。もわもわとはきだす煙が川をはっていく。
　列車の窓から子どもが手をふっている。勘太くらいの男の子だ。勘太も両手をふってこたえる。
　スイカを川に冷やしていると、舟がくだってきた。バシャッとしぶきをあげて勘太たちのそばをとおる。
「カヤでキャンプしてるやん」
　舟の客たちも「がんばりや」と手をふっている。

やがい映画会

がっこうで映画会がひらかれた。
映画は毎年、夏やすみに一回、こうていで上映される。
たいがいは古い映画だが、こんどは特別だ。
『鞍馬天狗角兵衛獅子』
きょねんの夏にできたばかり。鞍馬天狗はいわずとしれたアラカンこと嵐寛寿郎。杉作役には美空ひばり。チャンバラ好きだけでなく、ひばりファンにもたまらない。
さいしょ、この上映話をだれも信じなかった。ほんとうだとわかって、
「できて一年しかたたない鞍馬天狗の映画を見られる」
と、天と地がひっくり返るさわぎになった。
「国会ぎいんになりたい市長さんの政治力や」
といううわさがながれた。
勘太は当日、いつもより早く夕食をすませ、映画がはじまる二時間も前にがっこうに行った。
こうていには背もたれのない長いすが八十きゃくほど並べられていて、すでに半分はうまっている。
テッちゃんが前から二列めの席にいた。
「おそい。ぼくは四時にきたんや」
武史がきたので、ならんですわった。
七時。映画のじかんだ。
校庭はすっかりやみのなか。見あげると、空には白い小さなつぶがいっぱいあつまっている。その白いつぶつぶが帯になって、太くなったり細くなったりしながら、よこたわっている。
「空に白い帯がある」
「天の川やないか」
武史はそんなことも知らんのかという顔だ。
映画がはじまった。
パタパタと拍手がわきあがる。
美空ひばり、いや杉作のとうじょうだ。
お寺の前で杉作はずきん姿の鞍馬天狗にであう。天狗をピストルでねらう近藤勇。そのうでにかっとくいつく杉作。
鞍馬天狗がさっそうと白馬にまたがってやってきた。すくっと杉作をだきあげる。
そのとき……
スクリーンの上の空で星がひとつ、ぱっとまばたき天の川をさーっとよこぎった。
「あ、流れ星」
勘太が映画に目をもどしてみると、天狗ははしりさっていく。
映画がおわる。かえりはテッちゃんといっしょだ。

♪生まれて父の顔知らず　恋しい母の名も知らぬ
　テッちゃんはひばりの歌を口ずさんだ。
　三年前、十二歳のひばりは『悲しき口笛』をうたった。テッちゃんのおかあさんは「右のポッケにゃ夢がある」という歌詞が気にいり、いらい大のひばりファン。テッちゃんもえいきょうされた。
　勘太のおかあさんは、「子どものくせにおとなみたいな声だして」とひばりをけぎらいしている。
　勘太もどちらかといえば、ひばりはきらいだ。白馬をさっそうとあやつるアラカンの方がずっとかっこいい、と思う。
　その日、事件がおきた。
　だがし屋さんの「はせ」で、鞍馬天狗のベッタンがぬすまれたのだ。
　はせの店は、子どもたちがつうがくする道にめんしていえ、いつもおばあちゃんが店ばんしている。
　おばあちゃんは映画会に合わせて、アラカンの鞍馬天狗のベッタンを十枚しいれた。ほかのベッタンと別にして、目につくところにならべておいた。
　映画の日の五時ごろ、店の奥の台所で用をすませ、店にもどってみると、鞍馬天狗のベッタンがそっくりなくなっていた。目をはなしたのはほんの一、二分だったという。
「奥にいくまえ、ラムネを買いにきた男の子がいた。犯人はきっとその子や」
　はせのとなりは赤田の呉服屋。むすめは勘太のどうきゅうせい。だから赤田のおくさんは勘太をよく知っている。
「勘太くんがその時間に店にはいるのを見た」
　としょうげんした。

夏の思いで

　夏やすみもあと五日。
　勘太はしゅくだいの「夏やすみのおもいで」の絵をまだいかいていない。あわてだした
　画用紙とクレヨンをとりだし、頭にうかんだ順にまとまりもなくかきだした。
　さいしょにながれ星。画用紙のいちばん上にかいた。その下にアラカンの白馬。保津峡でのキャンプをおもいだし、じょうき機関車をグレー色であらわす。川をえがこうとして、川なら天の川をにしようと考えなおす。いちばん白にカヤをかきいれた。

二学期がはじまり、みんながそれぞれの「夏やすみのおもいで」の絵をだした。海や山、花火、おばあちゃんの里。どれもこれも元気があふれている。
そんななか、勘太の絵がイッ子せんせいの目をひときわひいた。おせじにもうまいとは言えない。だけど大きなひろがりをかんじさせる。
せんせいは勘太をしょくいん室によんだ。
なにかしかられることがあったか、とおどおどしている勘太。イッ子せんせいはにがわらいしている。
「どろぼうとまちがわれて大変だったわねえ」
勘太はしょくいん室がにが手。おどおどしている。
「メンコのこと、ここではベッタンっていうのね。おもしろい？」
「ぼくは下手やから……。アラカンの古いベッタンを持ってるだけ」
「嵐寛十郎のファンなのね」
「白馬でパカパカかけるとこが好きです」
せんせいは勘太の絵を指さして、
「アラカンの馬ね」
「アラカン、ながれ星をおいかけてるねん」
「じょうき機関車が川のそばをはしってるんだ」
「ちがう、天の川の上をとんでる」
「下のあみ、これ何？」
「カヤ」
せんせいは保津峡でのキャンプのことをきいて、
「勘太くん、カヤでお昼ねしていて夢をみたのね。この絵は夢がかいてあるんだ」
イッ子せんせいはぱっとなにかがひらめいた。
下宿にかえると本だなから『銀河鉄道の夜』をひっぱりだし、パラパラとページをくる。
つぎの日、鞍馬天狗の映画をみた？　とみんなにたずねた。ほぼ全員が手をあげた。
「あの夜、空に天の川がかかっていたのに気づいたひと？」
これは半分くらい。
「映画みてたんや。空なんか見てへん」
と裕三。「天の川」めずらしない」と言いだした。
「そうね、めずらしくないわね」とわらって、
「みやざわけんじ（宮沢賢治）という人がかいたの」
と、せんせいは『銀河鉄道の夜』の本をかかげた。
「列車で天の川までいくお話よ」
みんなの顔をみまわしてたずねてみる。
「もし天の川に行けたら何をみたい？」
子どもたちはかってなことを言いだす。ワーワーとさわがしい。
「五つにグループをわけるから、グループごとに考えてみて。つぎのつぎの週には、はっぴょうしてもらう」
といって、
「作文をかいて、それをろうどくするのもいいし、紙芝居でもげきでもいいわよ。持ち時間は五分」
とつけくわえた。
五人のはん長が決められた。それぞれのグループは十人だ。武史のグループに勘太やテッちゃん、隆三、ユキちゃん、タミちゃんがはいった。
つぎの日曜日、武史の家に十人があつまった。
武史は、勘太がイッ子せんせいによばれたことが気になっていた。
「せんせいになにをきかれたんや」
勘太は「夏休みのおもいで」の絵のことをはなした。
「アラカンの白馬がながれ星をおいかけてる、ってこたえた」
武史は「よし」と手をうった。
「ぎんがてつどうが、ながれ星をおいかけてることにしよう」
「それがええ」
みんなが頭をしぼりだした。

ながれ星の国

　ぎんがてつどうがながれ星をおいかける。そのあとをどうつづけるのか。
　武史グループの話しあいに熱がこもる。しゃべるのはおもにテッちゃんと隆三、それにタミちゃん。
「ぎんがてつどうがながれ星駅につく」
「ぎんがてつどうの客は王さまのやかたに行く」
「王さまとおひめさまが待っている」
「ごちそうを食べ、天の川を船でゆうらんする」
　ここまで話がすすんだとき、武史が
「ええこと思いついた」と、目をきっとひらいた。
　ながれ星は、地球にかんさつにきた。ながれ星人は空から人間のやることをよく見ていて、国にもどると地球そっくりの町をつくる。
「という話にするねん」
「星がながれているように見えるやろ。あれはかんさつがおわり、自分の国にかえっていくとこなんや」
　みんな「へえー」とこっくりうなずく。
「そしたら、天の川ぞいの町はちきゅうそっくりの町なんやね」
「ながれ星人はちきゅうを上から見るから、ぜんぶがさかさになる。そやからエンパイアステートビルもエッフェル塔もさかさにつくった」
「王さまのやかたは、さかさの国会ぎじどう」
「ほんなら、ながれ星人はさかだちしとるんちゃう」
「そや。人間をまねたから、さかさ人間になった」
「王さんはンカラア、おひめあまはリバヒ。アラカンとヒバリのさかさや」
　つぎつぎに出るとっぴょうしもないおもいつきをまとめて、武史はひとつの物語にした。
　ぎんがてつどうがながれ星をおいかけ、ながれ星駅にとうちゃく。じょうきゃくは、けらいにつれられて、さかさの国会ぎじどうのような王さまのやかたへ。さかだちのンカラア王とリバヒひめがむかえてくれる。
　ごうかな食事をごちそうになった後、さかさのクリーンエリザベス号にのり、色とりどりのほうせきがながれる天の川をゆうらん。岸べにはエンパイアステートビルやエッフェル塔がさかさにたっている。とおくにさかさの富士山が見える。
「げきにしましょ」
　とタミちゃん。
「はいやくを決めんといかん」
　武史がにやっとわらってつげた。
「ンカラア王は勘太、リバヒひめはユキちゃん」
「スカートでさかだちなんかでけへん」

　というもんくがみとめられ、ユキちゃんはリバヒひめの絵をもつだけでいいことに。
　ンカラア王役の勘太はさかだちが下手にきまってる。勘太の足をささえるのはテッちゃん。けらいには隆三。タミちゃんは物語のろうどく。かんとくは武史。あとの四人はぎんがてつどうのおきゃくさん。
　ということになった。
　さらにつぎの日曜日。みんなで新聞屋さんに行き、大きな紙をわけてもらう。としょしつでかりた本をみて、ぎんがてつどうや王さまのやかた、天の川、エンパイアステートビルなどの絵をかいた。
　はっぴょう会をむかえた。
　武史のグループはとりだ。
　ちきゅうの客が王さまのやかたにつくと、ンカラア王がでむかえる。
　というばめん。
「ガウアギャゴアクワゲギャ」
　勘太は、カラスがやぶれたのどからはきだしたときみたいなさけび声をはりあげた。
　さかだちの手がしびれ、たえられずに頭からゴツンと床におち、たまらずひめいをあげたのだ。
　きょうしつのみんなは、王さまがながれ星語で、
「ようこそながれ星国へ」
　と言ったとおもった。
　ぎゃーっとしかめた顔、きーっとくいしばった歯。ながれ星の国の王さまをみごとにえんじてる。パチパチパチパチ！
　勘太にさかんな拍手がおくられた。

いのしゅうじ
本名、井上脩脩。近鉄文化サロン上本町・文章教室講師

読切連載アカンタレ勘太6《てつぼう先生》文・挿画 いの しゅうじ

てつぼう先生

テッちゃんは鉄棒に足をかけてぶらさがっている。
勘太から、鉄棒でクルクルまわるたいそう選手のことを聞いて、自分でもかいてんしてみようと思ったのだ。
隆三が「やめとけ」と鉄棒から引きずりおろした。
「教えてもらわんとムリや」
「教えてくれるとこあるんか」
「カブノしょうがっこうの子は、かいてんできるんやで」
カブノしょうがっこうは隆三の家から歩いて二十分くらいの山あいにある。
「もくげきしたんや」
隆三はむずかしい言葉をつかった。
さっそく、ていさつにむかった。隆三、テッちゃんに勘太、武史、裕三。いつものメンバーだ。
カブノしょうがっこうの鉄棒は、通りぞいにたっている。男のせんせいが見まわりにやってきた。ややまる顔、しゃきっとした青年きょうしというかんじ。
「あのう、鉄棒でぐるぐる回ると聞いたんですけど」
武史がせんせいにたずねると、
「きみたちはどこのがっこう？」
「オゼしょうがっこう、二年」
「宮井せんせいのクラス？」
「あ、そうです」
「イッ子せんせいってよんでるやろ」
「なんで知ってるんですか」
「まあな、ええ人やろ」

せんせいはこうていにのこっていた四人をよんだ。
「クラタてつぼうをやってくれ」
四人はさかあがりをして、鉄棒にはいあがる。オランウータンみたいに両手で棒をもつ。そして一番右の子から順に、後ろむきにくるっとまわる。頭をさげてさかさにぶらさがると、かいてんの勢いにのって前方にぴょーんととびはねる。
それは目もとまらぬ早わざだ。
勘太が目をラムネ玉みたいにして、ぼーっと見とれていると、
せんせいが、
「やってみる？」
と、ほほえみかける。
「さ、さかさになるの、ぼ、ぼくいやです」
もぞもぞした言い方がよほどおかしかったらしい。
「ひょっとして、きみが勘太くん？」
顔をのぞきこんで、
「あたり！」
ガハハとわらった。
せんせいは、みんながクラタてつぼうができるまで半年かかったという。
「小野せんしゅみたいなとくべつなせんしゅを育てるのもいいが、みんながやれることのほうがもっとだいじや」
勘太は、おねえさんが「小野せんしゅは金メダルがとれる」と言っていたのを思いだした。
カブノしょうがっこうからの帰り道。
「クラタせんせい、なんでぼくのなまえ知ってるんやろ」
勘太は首をかしげてもたもた歩く。
「イッ子せんせいと呼んでることも知ってはった」
と隆三。
「イッ子せんせいはええ人や、というてたなあ」
テッちゃんが夕やけ空を見あげた。目があかね色にそまっている。
よく日。
きゅうしょくがおわると、テッちゃんがイッ子せんせいのつくえの前にたった。
カブノしょうがっこうの鉄棒のことをはなし、
「クラタせんせいにあいました」
「え！」
「せんせいのこと、いい人と言うてました」
「……」
イッ子せんせいのほっぺが、いっしゅんぽっとあかくなった。

読切連載 アカンタレ勘太 7《しらゆき雪ひめ》文・挿画 いの しゅうじ

しらゆき雪ひめ

　イッ子せんせいは、いつもの顔にもどっている。
「クラタせんせいはただのお友だちよ」
二人は若い教師でつくる「新しい教育を考える会」のメンバーだという。
がっこうがおわって、テッちゃんと勘太が帰ろうとすると、タミちゃんがかけよってきた。
「イッ子せんせいの言うこと、マにうけたんか」
タミちゃんは教室にのこっていたヒロ子をよんだ。
リブレバレイ教室にかよっているヒロ子は「あのことやね」と目くばせした。
「らいげつ、バレエきょうしつのはっぴょうかいがある。イッ子せんせいに招待券を二枚わたすねん」
タミちゃんはにやっとした。
「イッ子せんせいがクラタせんせいと見にきたら、友だちいじょうということがはっきりするやん」
つぎの日、

ヒロ子はイッ子せんせいにバレイの券を手わたした。券にかかれているプログラムは、
「しらゆき雪ひめ」
「まちがいじゃないの」
ヒロ子はフフフとわらった。
「見たらわかります。したしい人ときてください」
イッ子せんせいから「見に行く」の答えがかえってきたので、武史を中心にさくせんをねった。
一番前のまんなかの二つのせきを「予約席」にしてかくほ。そのりょうがわにユキちゃんとタミちゃん、男子はうしろのせきにじんどる。
「二人のようすがわかるはずや」
と武史。
はっぴょう会は市のホールでひらかれた。
「予約席」のはりがみをするのは勘太のやくめ。勘太はまっさきにホールにきて、せきに紙をおいた。
はりがみが何かのひょうしにおち、だれかが一つよこのせきにのせた。
とは勘太は知らない。
まくがあく少し前に、イッ子せんせいがやってきた。クラタせんせいといっしょだ。
イッ子せんせいはタミちゃんを見て、
「こんたん見え見え。だったらいっそのことと、クラタせんせいをさそったの」
二人が一番前のせきに行くと、二つの「予約席」がとなりあっていず、その間に一つのせきがある。
イッ子せんせいが「あら？」と小さくおどろいた。勘太が予約席のところにいくと、クラタせんせいが、
「勘太くんやね、たしか。ここにすわればいい」
と、間のせきに座らせた。
勘太がイッ子せんせいとクラタせんせいの間にわりこむかたちだ。
「こんなん、あきません」
と、せきを立としたとき、
「しらゆき雪ひめ」
がはじまった。
王女においだされて、森のなかで七人の小人とくらす白雪姫は、毒リンゴを食べてたおれる。そこに王子さまがとおりかかり、二人はむすばれる。
というおはなし。
リブレバレイきょうしつでは、白雪姫と王子さまは高校生くらいの子がえんじるのがならわし。ところが、ヒロ子がぐーんとじょうたつしたので、「小学生にも姫をやらせてみよう」ということになった。お姉さんは「白雪姫」、ヒロ子は「しらゆきひめ」だ。
一つのぶたいで「白雪姫」と「しらゆきひめ」が同時におどるのは、教室はじめって以来のこと。
（新しい時代になったんだわ）
イッ子せんせいの胸はきゅんとなっている。
ヒロ子のしらゆきひめがクルクルまいだした。
はなやかさでは、お姉さんの白雪姫にはとてもおよばないが、体いっぱいにつやつやとはねる。
いよいよ、おひめさんが王子さまとおどるクライマックス。というのに、テッちゃんは前にいる勘太の頭をこずいている。
「なんでせんせいの間にすわったんや」
イッ子せんせいはクスクスわらっている。